



釜山レポート : 影島・カンカンイ芸術村

阪野, 祐介
金, 潤煥
金, 仙花

(Citation)

海港都市研究, 14:91-100

(Issue Date)

2019-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011271>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011271>



釜山レポート：影島・カンカンイ芸術村

阪野祐介・金潤煥・金仙花

1. はじめに

2018年3月30～31日に韓国釜山にある韓国海洋大学校で、第10回世界海洋文化研究所協議会(WCMCI)国際学術会議が開催された。会議閉会翌日、釜山広域市影島区の‘カンカンイ芸術村(강강이예술마을)’(写真1)において約2時間のエクサカーションが実施され、神戸大学から佐々木衛名誉教授、奥村弘教授、高田京比子教授、濱田麻矢教授、佐々木祐准教授、釜慶大学から権京



写真1 カンカンイ芸術村全景

注) 2019年2月11日、阪野撮影。

仙研究教授、韓国海洋大学から金潤煥特別研究員、韓賢石講師、阪野祐介講師が参加した。エクサカーションでは、カンカンイ芸術村事業団企画広報チーム長である河恩智(ハ・ウンジ)氏の案内のもと、カンカンイ芸術村コミュニティセンター内の村博物館を見学し、村の来歴や現在の地区再生事業の取り組みについて理解を深めたのち、村内に点在しているパブリックアートのほか、造船所や倉庫群といった建造物などを見て回った。韓国では、2000年代半ばごろからパブリックアートを用いた地域再生事業が全国各地で盛んに行われるようになってきているのだが、このカンカンイ芸術村もまたその事業のうちの一つである。本稿では、カンカンイ芸術村の歴史を概観し、現在進められている地区再生事業の取り組みについてレポートする。

2. 韓国近代造船発祥地、カンカンイ村

カンカンイ芸術村は、行政区画としては釜山広域市影島区南港洞の一部(旧大平洞)を指し、北面对岸には観光地として有名なチャガルチ市場がある(図1参照)。中心市街地側からは、チャガルチ市場と同じく釜山の観光名所の一つとなっている影島大橋を通過して影島に渡り、すぐ右手西側に進む

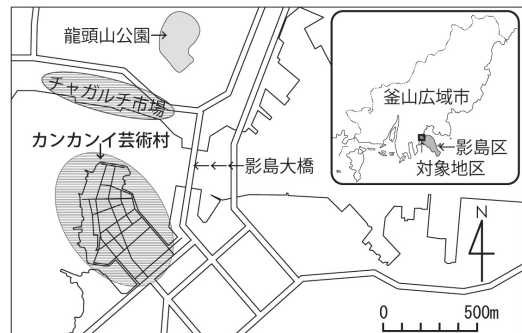


図1 カンカンイ芸術村周辺略図

とカンカンイ芸術村に到着する。この村の通称にも使われている「カンカン」は、鉄など

をハンマーで叩いた時に出る音を表す韓国語である。その名が示すように、この村の主産業は修理造船業である。村内の北側と西側には造船所が立ち並び、平日の日中には船体の古くなった塗装や錆、貝類、海藻類などの付着物を除去するグラインダーの音、重い金属と金属がぶつかりあう音が響き、塗料や油、金属のにおいが潮風とともに漂ってくる。村の東側の岸壁には大小数多の船が繫留されている。また村内の通りには船舶用品店が並んでいる。時折ミニバイクなどがけたたましい音をたてながら工場や用品店が立ち並ぶ通りを行き来する。しかし、日が沈むとあたりは街灯もまばらで薄暗くなり人通りもない。造船所が休業となる週末も同じようにひっそりとしている。路地裏に入ると、さらに沈黙に近い静けさがあたりを覆いつくし、村全体がうら寂しさを身にまとっているようである。いや、夜間や週末だけでなく平日の昼間でさえも、造船業が最盛期であったころに比べるとその活気は見る影もないほどとなり、「近代修理造船1番地」(カンカンイ芸術村事業団、2017)と称される村の産業は衰退の一途を辿っているという。

この地域における造船業の始まりは近代期にまで遡る。開港直後の1887年、神戸出身の田中若太郎という人物が田中造船所をこの地に設立したのがその始まりで、韓国における近代式造船業発祥の地とされている。日本の植民地支配下になり、1910年代の第1次埋立で土地の拡張が進み、1920年代には海岸線の開発が行われ埠頭やドックなどが設置された(カンカンイ芸術村事業団、2017)。その後、造船所や石油会社、物流倉庫などの建設が進んだ。それに伴い、相当数の人口流入があったことが推察され、地域内には造船業関連施設のほか、神社や寺院に始まり、派出所、病院、薬局、飲食店などの設置、進出も認められる。その後、1934年に影島大橋が竣工し、第2次埋立工事によってほぼ現在の姿に近い地形を示すに至っている(カンカンイ芸術村事業団、2017)。ちなみに、影島大橋完成前後に建てられ、今なお原形を残している建造物に朝室倉庫がある。朝室倉庫というのは朝鮮窒素肥料株式会社の倉庫のことで、朝鮮窒素肥料株式会社の創業者は、日窒コンツェルンの設立者野口遵(1873-1944)である。野口は、植民地朝鮮において鴨緑江流域での水力発電所や、興南の大規模窒素肥料工場を建設経営するなど、多角的な事業を展開した。

話を村に戻すと、1940年代については今のところ資料を把握できておらず、次に村の様子を知ることができる時期は朝鮮戦争後である。釜山には、朝鮮戦争時に全国から多くの避難民たちが逃れ集まってきて、いくつもの避難民村が形成された。今も釜山市内に数か所、小規模家屋が密集する地区としてその姿をとどめており、影島にもそうした地区がいくつか現存している。ただ、カンカンイ村はすでに造船所、倉庫群が立ち並ぶ工業地帯として比較的整然とした街区が形成されてきており、朝鮮戦争期にそうした小規模家屋が密

集する様子は見られなかったようである。現在、村では小規模家屋が密集した区画を確認できるが、それは戦後の1960年代以降の産業発展期に生じたと推測されている（カンカンイ芸術村事業団、2017）。

1960年代の韓国政府による造船業奨励政策や1970年代の遠洋漁業の活況で、カンカンイ村の産業は最盛期を迎えていく。かつての石油工場や製塩所なども造船所や船舶修理工場に姿を変え、また「カンカンイ村になれば、どこにもない」（カンカンイ芸術村事業団、2017）という話があったほどに船舶用品業が軒を連ね、数万種の部品を扱っていたのである。村では夜明けから夕暮れまで一日中ハンマーの音が鳴り、対岸の地域まで響き渡っていたという（カンカンイ芸術村事業団、2017）。その時代に活躍し村の産業を支えた重要な人物群が、「カンカンイアジメ（アジメは、おばさんを表す韓国語アジュンマの釜山方言）」である。彼女たちの多くは、戦争避難民家庭や都市貧困家庭、農漁村からの失郷民家庭出身であった。造船業や漁業といった産業は男性中心文化が強く想起されるが、ここカンカンイ村の場合アジメ達に象徴されるのである。しかし、村の景気は1970年代後半から徐々に陰りを見せ始める。造船業の低迷、遠洋漁業の衰退、そして船舶の大型化により、造船所の多くは大型船に対応できる甘川や多大浦、鎮海、巨済といった他の港湾へ流出し、小型造船所のみが残り、わずかに残った部品工場や販売所なども経営規模の縮小を余儀なくされた。1970年代末から1980年にかけて、造船所の跡地は高層マンションへと姿を変えた。それから30年以上が経過し、造船業、船舶修理業は再浮上することなく沈滞したまま、経済成長期に増加した小規模家屋も空き家や廃屋になったものも増え、70年末から80年に建設されたマンション群も老朽化し、そこに住む人々も高齢化が進んだ。「準工業地帯」に分類されカンカンイ村からは、各種公共サービスの撤退による住環境の悪化と、転入人口の減少という悪循環に陥ったのである。

韓国近現代の造船業を先導してきたカンカンイ村。戦後、村の生活と産業を支えてきたものの、産業の停滞と劣悪な生活環境の中で静かに耐え忍んできたカンカンイアジメたち。そうした状況の中で、2015年に村の住民たちの暮らしを再生しようと動きが生まれた。カンカンイ芸術村造成事業である。

3. カンカンイ芸術村とは？

2017年3月30日付の文化体育観光部報道資料によると、カンカンイ芸術村は、忠清北道陰城郡の「興味津々ファクトリーツアー」、慶南昌原市の「昌原産業歴史ツアー」ととも

に、文化体育観光部による「2017年産業観光育成事業」に選定された。産業観光とは、「主に企業体の生産現場や広報施設をはじめとした在来・伝統産業、過去の産業遺産などを活用した観光コンテンツをいう。産業観光は、観光客には好奇心を満たす学びと面白さがある見るものや体験を提供し、企業体や地域にはブランドや地域産業に関する広報を通して新たに得るものを創出する観光コンテンツとして脚光を浴びている」（文化体育観光部、2017）ものであるという。



写真2 甘川文化村の景観

注) 2019年2月11日、阪野撮影。

今から遡るとこと6年。2013年に韓国では「都市再生活活性化および支援に関する特別法（略称、都市再生特別法）」が制定された。これは、それまでのスクラップ・アンド・ビルド方式による都市再開発への反省から、住民主体による地域共同体の活性化と文化・芸術の活用という都市再生への転換を目指すことを制度化したものといえる。そして、釜山市では2015年に「芸術創造村」という公募事業を行った。この事業は、3年を期間として第2の「甘川文化村」を創出するという趣旨で始められた。「甘川文化村」（写真2）というのは、釜山市内にあり、朝鮮戦争時の避難民村を起源とする劣悪な生活環境に置かれていた不良住宅地区であったが、パブリックアートをを用いた地区再生事業によって全国的に注目される観光スポットの一つへと変貌した地区である。2015年の公募事業で釜山市に採択された「カンカンイ芸術村」事業も、アートプロジェクトを含む以下の6つのプロジェクトを設定し、2016年5月より本格的に開始された。

- ① 影島渡船復元プロジェクト：絶たれた航路、影島渡船を復元し、港湾都市釜山の近現代史を甦らせ、地域の特化した観光商品として村の共同体の自立と持続に寄与するプロジェクト。
- ② パブリックアートプロジェクト：音、光、色彩など多様な媒体と要素を活用した芸術家たちの創意的な作業を通して、不足している住民の便民施設（公園、街路灯、ベンチなど）を拡充して独特な景観を造成する。
- ③ 村博物館プロジェクト：大平洞一帯の近代文化遺産と生活文化を収集・記録し、これを単行本の出版、通り／空間展示（写真3）などへ連係し、地域のアイデンティテ

ィを浮き出させ、住民たちの自尊心を高めようとするものである。

- ④ 文化サランバン：住民、芸術家、行政など多様な主体が出会い、文化芸術で疎通し、興隆することで、カンカンイ芸術村造成事業に対する共感を形成し、共同体を強化する。



写真3 カンカンイ芸術村通り博物館

注) 2018年12月17日、阪野撮影。

- ⑤ パブリックアートフェスティバル：事業期間に作られるパブリックアート

の成果を基礎として、村の多様な場所で同時多発的に進行する芸術祭りを開催。

- ⑥ カンカンイクリエイティブ：地域固有のアイデンティティに再び光をあてる統合的なイメージ開発と記念品、コンテンツ等を制作、配布するカンカンイ芸術村広報プロジェクト。

甘川文化村やカンカンイ芸術村でも事業の軸となっているように、韓国においてパブリックアートを用いた地域改善事業が近年積極的に行われているが、まず 2006 年に文化体育観光部によって進められた“Art in City”がその始まりである。2009 年から、同部によってパブリックアートプロジェクトが推進された。このプロジェクトにより、芸術分野の雇用創出と低所得層住宅環境の改善が期待された。2009 年以降、アートプロジェクトが実施された「文化村」と称される地区は、2013 年の時点で全国に 55 カ所を数える。そのうち、広く知られる代表的な地区としては、ソウルの梨花洞や釜山の甘川などが挙げられる。これら文化村は、観光スポットとして脚光を浴び、経済的にも活性化することで地域の状況は一変した。ただし、観光客の増加は、住民たちに騒音やゴミ、プライバシーの侵害といった問題をもたらすこともある。実際にソウル梨花洞の場合、観光客増加に伴う問題によって住民の反発によって一部のアートが撤去されるまでに至ったという現実もある。その根底には、住民主体、地域コミュニティ主導の再生事業とは言えなかったという問題があるのだろう。そうした問題も踏まえ、カンカンイ芸術村では住民たちとその生活空間がただ対象化されるがままではなく、「直接主体となって、村の共同体と生活文化」を自力の基盤として確保し、生活環境の再生を目指している。そのためプロジェクトの運営形態は、住民組織、事業団、行政機関で構成された推進協議会が中心になっている。具体的には、住民組織として大平洞村会が、事業団としてローカルアクショングループのプラン b 文化

芸術共同組合が、行政機関は影島区役所と影島文化院が関わっている。プランb文化芸術協同組合は、本事業の実際的な業務と行政と住民の媒介する役割を担っている。

このような都市再生事業の結果、カンカンイ芸術村は、「異色の産業景観の観光資源化」という点で評価されている。その事業について文化体育観光部は次のように評価している。

「釜山影島区の影島大橋の横にある修理造船村は、19世紀末に日本人たちによって我が国最初の近代式造船所が建てられて以降現在までも住民たちが船舶修理工業を行ってきた場所である。ここでは、大きい船も小さい船も停泊していたり、地上に上げて修理・塗装する姿が、野暮ったいが異色的な見ものとなっている。また、最近ここは船の錆を除去するハンマーの音をまねた‘カンカンイ芸術村’という名前で地域の文化芸術家とともに多様な設置美術と壁画を通じて100余年経つ建物群の景観を多彩に変えていっている。釜山市は、修理造船村を海側から見回すことができる船上ツアープログラムに助成するなど、この場所の独特な産業景観が一つの野外博物館として観光客に近づいて行けるように事業を推進する予定である」（文化体育観光部、2017）と。さらに2018年には、同部の「地域文化ブランド」最優秀賞を受賞し、カンカンイ芸術村の事業は今注目を集めているのである。

以上がカンカンイ芸術村の事業の概要であるが、次にカンカンイ芸術村の取り組みの様子や今後の展望として、実際にプロジェクトの推進で中心的な役割を担っている河恩智氏へ行ったインタビューの内容をもとにレポートする¹⁾。

4. カンカンイ芸術村の取り組み

インタビュー調査を受け入れてくれた河恩智氏は、学部と大学院修士課程を韓国海洋大学で過ごし、大学院修了後テレビ局で放送作家としての経歴を持つ。2015年にカンカンイ芸術村事業団の職員公募に申請した際、河氏が修士論文で都市文化をテーマとして研究を行い、レポート作成のために既に大平洞地域（カンカンイ村）でのフィールドワークを行った経験を有していたことも評価され、プランb文化芸術共同組合の職員として働くこととなったという。

彼女がまず取り組んだのは、住民との関係づくりであった。村の住民が「直接主体となって、村の共同体と生活文化」（カンカンイ芸術村事業団、2017）を自力の基盤として確保し、生活環境の再生を目指す事業は、最初からスムーズに進んだわけではなかった。主体となる住民との信頼関係の構築が何よりも大変であったという。カンカンイ村の6つのプ

¹⁾ 以降の本文中で、出典が明示されていない「」部分は、インタビューでの河恩智氏の話を用いたものである。

プロジェクトを展開するうえで、地元住民へのインタビューは欠くことのできないプロセスであったが、河氏によると、当初カンカンイアジメたちは苦難と苦痛の歴史でもある自分たちの仕事や生活について語ることを恥ずかしがり、拒否されるなど、活動開始当初は混乱しかなかったという。しかし、事業団の活動が進むにつれて、地域のお年寄りたちは重い口を開き、「おとなしく平凡な人々の体でもまねながら積み重ねきた偉大な暮らしの話」（カンカンイ芸術村事業団、2017）を語り始めるようになった。それは、外部の芸術家によるアートプロジェクトだけではなく、住民向けの文化芸術プログラム（詩画、ダンス教室など）や、村新聞の発行、祭りの開催などを通して継続的に会って、話をする機会を経る中で生じた村の人たちの変化だ、と河氏は嬉しそうに話す。住民、工場技術者の生活と文化をベースに展開するカンカンイ芸術村事業では、芸術創作活動でも芸術家たちとともに住民も創作の主体となっており、そうした活動が住民一人一人に変化をもたらし、カンカンイアジメがかつては語らなかった過去を語るようになったのである。

現在、カンカンイ村の人口は2500人程度（2015年時）で、事業団の村祭りなどのイベントには多い時で500人ほどが参加している。また直接事業に関わっている住民は300人あまりいるとのことで、できるだけ多くの住民が参画できるように住民と事業団とが協力して事業を企画している。例えば、村博物館プロジェクトもその一つである。村博物館は、村の窓口的な役割を担っているカンカンイ生活文化センター（写真4）の2階に開設されている。この生活文化センターは、旧大平洞事務所で事務室や多目的室、小さな図書室のほか、敬老会などが活動するコミュニティセンターであった。現在のセンターも、そうした機能を引き継ぎ発展させる形で、1階には村カフェとコロキウムやワークショップが開催できるコミュニティホール、2階には村博物館のほかに会議室、運動スペースが設置されている。村博物



写真4 カンカンイ生活文化センター

注) 2018年12月17日、阪野撮影。



写真5 村博物館内の展示の様子

注) 2018年12月17日、阪野撮影。

館では、大平洞の歴史や地理的変化などの展示とともに、地元住民の協力で収集した造船所、修理工場、鉄工所などで実際に使われてきた様々な用具を数多く展示している（写真5）。この展示品の収集過程での住民とのやり取りも、村の事業を持続させるために必要な住民参加の意識を高めていった。そして村の住民たちの語りは、歴史編、産業編、生活編の全3巻からなる『カンカンイ村 100年の響き』として事業団から発刊された。同じく村博物館プロジェクトの一つで、毎週末に開催されているカンカンイ芸術村定期ツアーでは、地元住民がボランティアガイドとして村内を巡りながら造船業の仕事や生活の様子を語っている。このように、アートだけではなく多様なプロジェクトに住民参加型を特色とするカンカンイ芸術村事業において、地元住民自身がやりがいを感じ、「この事業をやって良かった」と声をかけてくれるという話を、河氏は住民との出会いに感謝しながら、充実した表情で語ってくれた。同時に、住民たちの積極的な参加の背景には、事業団の働きかけだけではなく、長い間ともに修理造船業で汗水を流してきたという自負を礎とするしっかりとした村の自治組織があった点も重要であったと述べている。

もちろん、すべてが順調に事業が進んできたわけではない。例えば、カンカンイ芸術村でひと際目立っているアート作品、「我々みんなの母 Mother of Everyone」（写真6）の制作をめぐる起きた出来事である。この作品はドイツ人芸術家ヘンドリック・バイキルヒ氏による壁画で、マンションの側壁に年老いた女性の顔が大きく描かれている。この女性は、ある特定のモデルとなる人物は存在しておらず、バイキルヒ氏が村内を歩きながら出会ったカンカンイアジメ達から喚び起こされたものであるという。事業団は、この壁画について事前に行政機関、村の代表、アパートの代表との合意と、事業の趣旨と壁画の説明文を掲示するなど地域への理解を得て進行していたはずであった。しかし、実際に壁画が完成すると、アパート住民の中から「怖い」といった苦情がいくつか上がったという。それを受けて行政機



写真6 マンション側壁の壁画

注) 2018年12月18日、阪野撮影。

関と事業団は住民との意見交換を行い、また住民自身の慣れもあって苦情も沈静化し、今では地域の日常の風景の一部となっている。この出来事は事業を進める際の住民の視点を考える上で、「驚きであり、反省点」となったという。

1998年、大平洞と大橋洞の行政区域統合により、この村からは役場、交番、金融機関など公的サービスを提供する施設が消え、商業施設の流入もほとんどなく、住民の生活の利便性は急速に悪化した。そのような状況の中で、本事業は、住民と行政、事業団からなる推進協議会を中心に、住民のために、共同体のために、村が発展する方向性を模索してきた。そして、現在地域住民が積極的に参加する活動が根付きつつある。現在、カンカンイ村の事業は、3年という期限で公的資金が投入され展開しているが、公的資金の支えがなくなっても村の住民が自立して住みよいまちを作っていけることに重点を置いている。しかし、それでもやはり「3年は長くない」、と河氏は言う。「企画や計画して、実行する時間には足りない。“食逃げ”という言葉がある。善意を持って入って来て、都市再生事業を展開して、その後の継続事業がないと都市再生事業を進めることができない。住民の立場からすると、“食逃げ”に見られる可能性もある。このようなシステムの問題は、行政機関の忍耐が必要である。韓国では市長や区役所長の任期は、通常4年で、事業はこの期間以内に終了する必要があるためだ。そのため、通常3年の事業が多く、長期の企画はない。行政側の長期的な計画のもとで都市再生のプロジェクトへの支援や進行ができること」が、今の課題であり願いであるという。

5. おわりに

カンカンイ村の歴史は、「過去100年の韓国近現代史」(カンカンイ芸術村事業団、2017)の縮図である。開港期に韓国最初の近代造船所として始まり、日本の植民支配を経て、朝鮮戦争後は主産業の一つとして長らく韓国経済を支えてきた造船業を先導する地であったが、1980年代以降の船舶の大型化や繰り返される経済の浮き沈み、国の政策に翻弄され、2000年代には最盛期の村の活気は見る影もなく、生活環境も悪化の一途をたどっていた。

そうした中で、カンカンイ村のプロジェクトは、既に韓国国内でもいくつかの“成功”を体験していたパブリックアートを活用した都市再生事業としてスタートした。ただ、カンカンイ村の事業の特徴は、アート作品そのものがプロジェクトの核心ではなく、「村の人々と一緒に文化芸術稼活動を行なう」ことに力点が置かれ、アートはあくまでも「刺激」であるという点であろう。カンカンイ村において重点が置かれたことは、村の自立であり、村の住民たちの生活環境の改善である。「今、ここで生きている方々のより良い生活」がこ

の事業の核なのである。

将来的に、このカンカンイ村からは造船所や修理工場がなくなってしまう可能性は決して低くはない。もしその時が来たら大規模再開発が行われるだろう。また、カンカンイ芸術村プロジェクトが進行するにつれて、村は観光の対象となることもあるだろう。2018年に新たに進められている海バスプロジェクトはいわゆる観光コンテンツであるが、「自力の基盤である収入のための事業で」あり、さらに事業団は、今後「オープンファクトリー事業も企画している。この町の産業空間である260個の工場を、ツアー形式で、工場見学や体験などを計画している」という。ただ河氏は、観光対象として「見に来るだけではなく、村をよく感じ、覚えて帰ってほしい」という。こうした観光コンテンツの計画は、収入源の確保という目的もあるが、その根底には「このような空間があまりにも簡単にならないでほしい」という感情が流れている。国家の政策やグローバルな経済の状況に翻弄され常に変化にさらされるこうした地域が見捨てられることなく、人々の関心を集め、訪問者が増えることを望んでいる。

参考文献

- ・カンカンイ芸術村事業団編（2017）『カンカンイ村100年の響き・歴史』釜山広域市影島区・影島文化院
- ・鄭玉姫（2015）韓国・釜山市甘川における文化村の展開と観光、立教大学観光学部紀要17、52-61頁
- ・文化体育観光部（2013）『品格ある文化国家大韓民国：政策資料集②文化芸術2008.2-2013.2』、（韓国語）문화체육관광부（2013）『품격 있는 문화국가 대한민국: 정책자료집 ②문화예술 2008.2-2013.2』
- ・文化体育観光部報道資料（2017）「2017年産業観光育成事業」支援対象3か所選定—釜山影島、忠北陰城、慶南昌原を差別化された産業観光地として育成—、（韓国語）문화체육관광부, '2017년 산업관광 육성 사업' 지원 대상 3곳 선정-부산 영도, 충북 음성, 경남 창원을 차별화된 산업관광지로 육성-